九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

教育思想の淵源と「建学の精神」に関する一考察 ：大分県出身の大学創設者を事例として

岩武, 光宏
拓殖大学 ： 専任職員

https://doi.org/10.15017/4776869

出版情報：総合文化学論輯. 15, pp.25-41, 2021-11-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies
バージョン：
権利関係：Copyright (C) 総合文化学研究所 all rights reserved. この論輯の全ての文章・画像の権利は、 総合文化学研究所に属します。無断での使用・転載を禁止いたします。

教育思想の淵源と「建学の精神」に関する一考察

― 大分県出身の大学創設者を事例として ―

岩武 光宏

はじめに

本稿では「人間中心の社会」について考察するための基礎資料として大学創設者の輩出に繋がるダイナミズムの仮説を提起する。以下に述べるように「人間中心の社会」は、現在においても社会変革の柱となる概念である。そして、その社会変革の一翼を担っているのが大学である。特に建学の経緯、「建学の精神」や大学変革には、社会変革が深く関わっている。本稿では、このような視点から大学改革の根幹に内在する創設者の教育思想および「建学の精神」の生成過程を論じる。

まず、現代の「人間中心の社会」については、次のように考えられる。

かつて「異能のインテリジェンス将校」[1]といわれた岩畔による半世紀余前の著書『科学時代から人間の時代へ』［1970］について、川合［2019］が、岩畔の示唆するものを「近代科学文明を精神的に消化」すること、その先に『「世界人類の人間性恢復」を目指す新たな人間学の建設によって文明の新しい道筋を見通す』(pp.68-70)と論じているように、大戦終盤で実際に使われた核兵器の威力を目の当たりにしたことで世界観の大転換があったことが推察される。

再び川合［2021］によれば、岩畔が唱えた世界問題とは、「全面核戦争の脅威を背景に近代科学技術文明の人間学的転換を要請する」(p.175)と説明しているように、まさに世界史的な課題であり、科学技術の進歩が人類絶滅をも可能とするレベルに達した現実とそれを制御するには人間性を高めることが近道であることを示唆している。いいかえれば、科学技術の進展には哲学が絶対的に必要であることを意味する。

そして前世紀末から世紀を跨いで四半世紀近くの時間を経て人類は継続的な課題に直面している。今日的には、科学技術の進展と地球環境問題の関係性についての議論にも繋がると考えられる。現在、わが国では目指すべき未来社会像として Society 5.0 を提唱している。Society 5.0 とは、「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会（Society）」[2]と定義されている。さらに、いわゆるデジタル革命にともなう「人工知能」（Artificial Intelligence、AI）の発達した未来社会について巷間では多種多様な議論を巻き起こしている。それは単なる理想的社会への希望的観測にとどまらず、制度設計や運用を誤ると人類を滅ぼす危険性をも孕んでいることにも言及する[3]。科学技術の進展による恩恵と脅威は表裏一体の関係にある。つまり時代が変わっても前述の岩畔の憂慮が潜在的に継続しているこ

とを暗示する。そしてこのように「人間中心の社会」[4]が求められている。

五神［2019］は、人を中心とする時代を「資本集約型社会から知識集約型社会への転換」(p.49)と説明しているように、この転換において大学の存在とは、近代社会における「知」を蓄積した「資源」と位置付けている。この趨勢を背景に、今後の大学改革は Society 5.0 の実現に向けて教学と経営の両面から本格化するであろう。

これにかんがみ今後は、時代の転換点という認識のうえで、知識集約型社会の拠点たる大学像を社会構造的視点から検討するが、現在のこのような動向は、時代背景こそ違えども、過去において数多く起こっていた。実に社会構造の変化が「建学」のモチベーションに繋がった事例は全国各地に点在する。すなわち大学の未来像を検討するためには、その建学の原点まで遡って整理しておくことが問題提起のための不可欠な理論的基盤になると考える。そのために本稿を議論の前段の１つとする。そして、考察の対象は大分県出身の大学創設者に設定する。くわえて拙稿［2020］で論じた「新・旧システムの角逐があった地域に知的欲求の高まりがみられ、やがてそれが建学のダイナミズムに繋がる」という仮説を中心に論じる。この仮説に内在する「中心と辺境の関係性」から生じるダイナミズムは、広義において「人間中心の社会」への転換を示唆するものであり、同県を考察することで、普遍的な概念に触れることを試みる。

ここで大分県を対象とする理由であるが、拙稿〔2018〕であきらかにしたとおり、旧制私立大学 25 校[5]の学祖・創設者の出身分布をみれば、同県は 4 名を輩出している。この数字は京都、山口、東京に次いで多いからである。辺境性という意味においては、山口県の次に位置を占めている。

とりわけ筆者が注目した点は、歴史的特異性である。たとえば、玉永、坂本〔2009〕は、1595 年に作成されたルイス・ティセラの日本図（日本を単体で描いた最初の地図）で九州そのものを「Bungo」として、大きなマークをつけて、この国の中心地であると表記し、「Japan」と異なる国と認識していたことを指摘したうえで、そのような誤った情報が伝えられた理由について、戦国のキリシタン大名・大友宗麟による南蛮貿易やキリシタンによる布教活動が活発であったことを挙げている。『ルイス・フロイスは宗麟について「日本の王侯中もっとも思慮あり、聡明英知の人」と語っている。こうした Bungo の王の国際社会に向けた活動があたかもアジアの独立国のように映り、ヨーロッパの人びとに伝えられたのであろう』（pp.4-7）と論じており、その存在の特異性は驚嘆に値する。なお、同県の歴史的特異性については後段にて詳述する。これらのことを勘案すれば、仮説を実証するに適切な対象と考える。

現在、私学を取り巻く環境には複雑かつ構造的な問題が噴出しており、本編の対象とする地方の周縁にとどまらず、広義の教育思想を俯瞰することが喫緊の課題であり、かつ不可避の情勢が到来したものと考える。したがって、この試みは、きわめて幅広く、かつ奥深い領域であり、筆者の力量や紙幅にも制限があることから、前掲の仮説を中心に、その試論に考究の材料を求めることとする。そのため過去に発表した論考と一部分において重複した内

容があることを、あらかじめ断っておきたい。そして許されるならば、この課題について本論輯でさらなる検討と論議を展開していきたいと考える。

大学史にみる範型の系譜

大分県の事例を掘り下げる前に、大枠の流れを概観してみる。また、ここでは当該地域を考察する視座として、大学史全体についても俯瞰しておくことが必要であろう。

大学史の淵源を世界史的視野で求めれば、12 世紀末から 13 世紀にかけて中世ヨーロッパで発生した知的活動を挙げることが一般的である。すなわちリベラル・アーツ、神学、法学、医学の知識を教えたり、学んだりする活動が、いくつかの拠点を中心に組織化されたのである。中世ヨーロッパの知的活動を大学の淵源とする論拠は、「university」や「college」という名称の起源がここに認められることに説得性を担保されよう。さらに、講義や討論、試験や学位の制度、リベラル・アーツ修得と専門職養成という学部構成、一定の自治や自律性など、現代の大学に継承されたスキームの原型をみることが、その根拠である[6]。一方、日本における淵源とは、大学概念発生以前、あるいは帝国大学以前の高等教育をどこに求めるかという問いでもあり、意外に難問である。

吉見［2021］によれば、『日本における「大学」の誕生は古く、古代律令国家にまで遡る。大宝律令が制定された八世紀初頭、全寮制の大学寮が設置された。そこでは学長に当たる「大学頭」が全学を仕切り、教授に当たる「博士」が教鞭をとり、試験に合格した学生に奨学金を出し、国家運営の中枢を担うエリートを育成していた』(p.284) と論じているように、あたかも現代の大学の範型をみるようである。それはまさに官吏養成機関であったことにほかならない。中世ヨーロッパのそれとは性格が異なり、あきらかに同質ではない。再び吉見によれば、『古代日本の大学で教えていたのは儒学、漢文、算術の科目で、初期には儒学優位だったが、やがて漢文が勢力を伸ばし、法学も地位を固めたという。唐の高等教育は圧倒的に儒学中心だったのに対し、日本ではその唐の先進的な知識をいかに輸入するかが重要なので、翻訳学としての漢文の地位が上がったらしい。だから漢文の地位の高さは、近代日本における英独仏文学の地位の高さと重なる。要するに、明治日本が西洋化によって支配体制を固め、古代日本は中国化によって支配体制を確立したのであり、「大学」はそのために存在した』（前掲、pp.284-285）と指摘するように、大学の存在は、いつの時代においても外国からの影響が不可避であったことに論を俟たない。

この官吏養成の範型は明治期に出現した帝国大学に非連続的なる連続性をもって継承されたと考える。一方で私学の創設は、源流を平安時代とする綜藝種智院、室町時代に源流がある身延山大学、江戸初期の学寮を起源とする駒澤・龍谷・大谷の各大学などが挙げられる。828（天長 5）年に弘法大師空海が創設した綜藝種智院は現在の種智院大学になっている。人文学部のなかに仏教学科、社会福祉学科をもつ大学として建学の精神を継承している。綜藝種智院は真言密教の思想をもって、社会に貢献する人材の育成を目的としたわが国最初の庶民に開かれた私立学校[7]であったという歴史を有している。

他方、1549（天文 18）年にフランシスコ・ザビエルが来日した。以降、カトリック（イエズス会）による教育事業は 1561 年ごろから教会でキリシタンの子弟に日本の文字などを教授する初等学校の設立が始まり、1581 年には全国に 200 校が数えられた。このような状況で巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノが来日。ヴァリニャーノの計画にしたがって、まず 1580 年にセミナリオ（神学校）が有馬と安土に、コレジオ（学院）が府内（大分）に、そしてノヴィシアード（修錬院）が臼杵に、それぞれ設立された。その後、本能寺の変（1582 年）、島津義久の豊後侵入（1586 年の豊薩戦争）、豊臣秀吉の伴天連追放令（1587 年）など、変転する政治情勢や迫害によって、中断されたり、移転・合併されたりをやむなきに至ったが、その間にもこの教育は受け継がれて、1614 年の禁教令発布までの約 34 年間、文化の交流に少なからぬ足跡を刻んでいる[8]。以降 300 年近い空白期間を経て、1913（大正 2）年に東京紀尾井の地にヘルマン・ホフマン師を初代学長として専門学校令による上智大学の設立[9]というかたちでザビエルの宿願を成就させている。また、明治期のキリスト教宣教において、カトリックとプロテスタントではアプローチが異なっていた[10]。プロテスタントは都市部で知識階級に取り入ることで、お抱え教師として浸透していった。これに対してカトリックは過去の迫害の経験から地方を中心に教育と社会事業を中心に浸透していったのである[11]。この経緯をみるに明治日本のキリスト教における宗派間の競合や角逐は教育機関設置と密接不可分の関係性を含んだ事業展開であったといえよう[12]。

このような近代以前の建学の軌跡を概観したうえで、わが国最初の近代大学として創設されたのは東京大学（1877 年）であることに論を俟たない。1886 年に帝国大学令により帝国大学と改称、1897 年に京都に二番目の帝国大学が設置されたことにより東京帝国大学と改称された[13]。その後、東北、九州、北海道に帝国大学は設立され、1918（大正 7）年の大学令までわが国の正規の大学は 5 つの帝国大学のみであった。この帝国大学にも広範かつ古い前身があった。しかし前掲のような私学は、高等教育機関として独自の古い起源をもつ事例も少なくない。なお、わが国の中古～中世～近世の時代区分に起源をもつ継続的な教育機関は概ね仏教系である。これらの学校群は明治期に専門学校となり、各宗派間の角逐[14]、神道系やキリスト教系の学校との対峙、さらに法学系私学群との競合を経て大学令で旧制大学になったものも散見される。その多くは、それぞれの宗派の僧侶を養成する目的で江戸初期から「学林・檀林・学寮」などと呼ばれる教育機関を開設したものであった。しかし幕末維新期の社会変動において、いわゆる廃仏毀釈の嵐が吹き荒れ、生き残りのための一般化が必要だったと考える。すなわち僧俗共学へと舵を切るなかで復古主義から欧化主義、さらに国粋主義へと社会情勢の変転に直面しながら、改革派と守旧派による宗派内での角逐と葛藤は必至であった。そのほかにも明治期には文理の多種多様な専門学校群の出現がみられる。この構図について天野［2009］は「法的な認知を受けることになる帝国大学以外の諸学校が、帝国大学の存在を意識することなしには自己形成を果たすことが不可能であったこと、帝国大学とのさまざまな葛藤、対抗と同調のドラマをはらんだ関係性のなかで生成し、発展を遂げざるを得なかったことを意味している」（p.5）と論じており、現在に繋がる帝国

大学とそれ以外の大学の関係性を浮き彫りにしている。この修辞には近代大学史の端緒における核心が凝縮されていると考える。いいかえれば帝国大学設立以降、近代国家建設と各大学の発展は軌を一にしてきたことにほかならない。

大分県に点在する建学の起源

現存する私立大学に繋がる建学を実践した人物（大学創設者）を大分県は多数輩出している[15]。具体的には、福澤諭吉（慶應義塾大学）、金丸鉄、伊藤修（法政大学）、元田肇（中央大学）、廣池千九郎（麗澤大学）など[16]が挙げられよう。

以上の人物の地元とされる地域は、いずれも宇佐神宮から半径 30 ㎞圏内であることに気が付くであろう。これらの傑出した人材が輩出された大分県の地域特性とは何であろうか。管見の限りでは、その前史的なダイナミズムの淵源として 749(天平勝宝元)年 12 月の終わりに九州宇佐の地から八幡神が入京した（八幡神の輿が東大寺に入る）事績に遡れると考える。この入京は東大寺の盧舎那大仏の造立に協力した神が鋳造の終わった直後の大仏を礼拝するためであったという[17]。なお「八幡」の文献上の初見は『続日本紀』、737（天平 9）年４月の条にあり、これを論じることは別の機会に譲りたい。

飯沼［2014］によれば、神と仏教による鎮護国家を八幡神の入京により実現するとし、「中央の政治と密接に関係しながら、日本の宗教の最前線を走り、神仏習合の世界の形成を推進した」（p.10）と論じているように、その影響力の強さは明白である。また、八幡神は日本で最も早い段階で仏教に遭遇した神である。その際のキーマンともいえる人物は実在した僧侶の法蓮である。法蓮は医療活動をしていたと伝えられるが、そもそも律令制下では、僧侶による医療は制約され、これに反すれば還俗の罰を与えると規定されていた。それでは、なぜ、僧侶の法蓮による医療は認められたのか。再び飯沼によれば、「法蓮の医療は、仏教的医療行為であったことはまちがいない。そして、それを私は放生という行為であると考えている」（前掲、p.29）と述べており、「法蓮は宇佐の地において、放生を行い、軍神八幡神に象徴される律令国家の軍隊がなした大量殺戮から起こる恐るべき病を防ぎ、それに成功したため褒賞を与えられた」（前掲、p.30）とその理由について説明しているように、法蓮が神仏習合を進めるうえで不可欠な存在であったことを窺わせる。

八幡神の出現した宇佐は国東半島の付け根に位置しており、古代ヤマト国家における国境地帯であり、対隼人との戦いの最前線でもあった。そのため、国境を防衛する軍神と国境での殺生によって起こる病から人々を救う仏教的性格を兼ねた存在であった。すなわち八幡神は軍神の顔から里の鎮守という「戦い」と「慈愛」の相反する両面を包摂した神なのである。いいかえれば、観念的というより実践的でもある。人間の営みで避けられない戦闘という現実とそれにともなう仏教的医療行為（放生）がワンセットになっていることが特徴である。このことは精神文化というものの、観念論ではなく、実践的な具体論が息づいた地域性が形成された証左である。

具体的にいえば、宇佐八幡宮に放生会という祭がある。720 年の「隼人の反乱」の平定に

手をかした八幡神が、殺生の罪を悔いて始めた、あるいは、その反乱後、豊前海に蜷（貝）が大発生し、そこから悪気が漂い、病気が流行しようとした時、それを防ぐために始まったという[18]。すなわち、「新旧交代システムの角逐があった地域に知的欲求が勃興する」という仮説に照らすには、古い事績ではあるが、角逐のなかから出てきた叡智こそ八幡神そのものではあるまいか。この事績は地域の教育思想の淵源におけるエポックの１つであると考える。なぜならば、放生という行為が示すものは、生を放つことによって、防衛のために生じた殺戮を鎮めるという宗教的なようで、きわめて合理的かつ実学的な行為であることが想起されるからである。いいかえれば、戦闘行為という極限状態から人間性恢復へと教導する行為を意味する。

ちなみに、三大八幡宮の１つとされる筥崎宮（福岡市）によれは、放生会について『筥崎宮放生会は「万物の生命をいつくしみ、殺生を戒め、秋の実りに感謝する」お祭りです。その起源は「合戦の間多く殺生すよろしく放生会を修すべし」という御神託によるもので、千年以上続く最も重要な神事』（同宮ホームページ）[19]であると説明しているように、今日的に定着した年中行事においても、その意義と伝統が護持されていることを認識できる。

なお、八幡神の出現は、地域的性格と無関係とする説や「はやり神」説、国策展開による信仰など、諸説あるとされている[20]。しかしこの場合の地域特性とは、前述の繰り返しになるが、あくまでも宇佐・国東という場所が古代国家における西の国境地帯であったこと、その特性は朝鮮半島、大陸勢力と密接な関係をもつ場所に位置しながら、畿内・瀬戸内地域とも強い絆[21]をもっていたことに由来している。

古川［2017］は、古代日本において明確に国境を想定した概念は生まれなかったと指摘したうえで、ブルース・バートンの概念を敷衍して以下のように論じている。

『律令制の確立により、境界の概念は明確さを増し、「化内」と「化外」の区分と「辺」という概念が出現した。ここでいう「化内」とは直接日本の支配下にある地域を指しているのに対して、「化外」とは大陸の諸国家や列島周辺の種族社会のように直接日本の支配下にない地域を指している。また、「辺」とは「化内」と「化外」との境界を指す概念であった。なお、ここでいう「辺」は境界線ではなく、境界地域であり、①本州北東部にエミシとの境界、②南九州・南西諸島にハヤト・南島人との境界、③東シナ海・玄海灘などにアジア大陸との境界があった』[22]というように、まさに宇佐・国東半島は、古川のいう「辺」に該当する地域だと考える。

飯沼［2014］は、「初期のヤマト国家の西の境界は、瀬戸内海の出入り口となっている関門海峡と豊後水道の線にあり、この両方を含む国が豊国であった。豊国は、ヤマト国家の西側の境界であり、この国の南には隼人の国があり、北に関門を越えて朝鮮半島があり、527年には、筑紫（福岡県）の国造磐井が反乱を企てているように、いまだ筑紫や火の国もヤマト国家の支配の及ばない化外の地域であった」（pp.15-16）と論じており、豊国すなわち現在の大分県に該当するエリアが国境地帯であったことを示唆している。今日の精緻な日本地図の境界概念とは大きく異なることはあきらかである。

さらに神仏習合にくわえて大友宗麟の時代は南蛮貿易でポルトガルとの交易拠点であった。そして豊臣秀吉により所領が細分化されて以降は明治まで小藩分立の時代が続いた。これらの地理的・政治的・宗教的な複合要因をもとに地域の多様性は形成されてきたのである。

ところで、前述の巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノは日本を三教区に分けている。具体的には、ミヤコ（近畿）、豊後（東九州）、シモ（下＝西九州）という三つの布教区であり[23]、イエズス会が豊後に注力していたことが明白である。大友宗麟というヒューマンファクターが作用したとはいうものの、イエズス会の「適応主義」[24]と八幡信仰的土壌（神仏習合）のもつ「受容力」とが知的欲求をも介在させた交換関係にあったことは見逃せない。既述のように、西洋人が「Bungo」を日本列島の中心地と錯誤していたことや、諸侯のなかで宗麟をもっとも聡明英知と評価した背景には、異文化を積極的に受け入れた開放性が中世の豊後府内から同心円状に豊前・豊後地方に浸潤していった状況であったことにほかならない。しかしながら、迎え入れられた側（西洋人）からの評価とは、客観性に乏しく、ある程度は割り引いて考える必要があるだろう。

このような文化的融合と地理的要因は、後に盆地文化という小宇宙が県内に多く生成されることにも影響している。代表的なものは、1817 年、日田に広瀬淡窓が創設した「咸宜園」であり、当時は日本最大級の私塾といわれた。淡窓在世中の入門者は 3081 名、北は津軽、西は壱岐、薩摩まで 65 か国におよんだという[25]。塾出身者は高野長英や大村益次郎、清浦奎吾、上野彦馬など多士済々であった。小藩分立によって県内に多くの特色ある藩校や私塾が開かれたことが同県の人材輩出に大きな影響を与えたことはいうまでもない。また、寺小屋の分布をみても古くから充実しており、初等教育が発達した地域性は特筆に値する。私塾の数は明治期まで含めると 166 が確認され、代表的なものに前述の咸宜園をはじめ三浦梅園の梅園塾、脇蘭室の菊園、帆足万里の西崦精舎などが挙げられよう[26]。

以下では前掲の大学創設者の出自を整理する。そのいずれもが当時の支配階層ではない。

福澤諭吉は中津藩の下士であったため、理不尽な封建の門閥制度に辟易していたことは有名である。百助（諭吉の父）も遊学の学資を封建制度によって阻まれており、豊後日出藩の帆足万里の門を叩いている[27]。また、金丸鉄、伊藤修も杵築藩の下級武士であった。しかし同藩では早くから学問奨励の気風があり、藩校「学習館」では西洋医学やフランス語も教えていたという。杵築市ホームページでは、「士族の子弟はもちろんのこと、平民の子弟も藩校へ通うことが許されました。教授には三浦梅園や帆足万里ゆかりの者たちが起用されるなど、質の高い教育を行い、その結果、数多くの人材がここから輩出されました」[28]と述べており、同市に息づいた学問奨励の風土について十分に感知される。

元田肇は杵築藩領内の猪俣家に生まれた。厳しい家庭環境から儒家の元田竹渓（帆足万里の高弟）、直の父子に見いだされ、元田直の養子となった[29]。

廣池千九郎は中津藩の農家の出身である。中津市学校（慶應義塾の関連校）に学び、小川含章（帆足万里の高弟）の私塾麗澤館で漢学を中心に実学を学んでいる[30]。

以上の創設者は支配階層（徳川幕藩体制）の認識力とは異なる眼差しを持っていたことは

確かであろう。その眼差しとは、徳川 260 年の安定的な環境下で生成された幕臣、直参の「教養」とは異質のものであったといえよう。学問を職分とした上級武士は長い天下泰平の期間での観念論に自己陶酔していた傾向は否めない。これに対して、辺境かつ角逐の地での末端から生み出された教育思想は、まさに生きるための実学であった。圧倒的な認識力の差があり、後の幕府崩壊過程およびその顛末をみれば、ここでは詳論は必要としない。

〔表〕本稿で取り上げた大学創設者一覧

創設者	出身階層		学問的基盤	創設した大学	主な経歴
福澤諭吉	中津藩	下級武士	長崎遊学、適塾	慶應義塾大学	啓蒙思想家、教育者
金丸鉄	杵築藩	下級武士	学習館、法律学舎	法政大学	法学者、大阪府会議員
伊藤修	杵築藩	下級武士	学習館、法律学舎	法政大学	代言人（弁護士）
元田肇	杵築藩	儒学者の養子	開成学校、東京大学法科	中央大学	鉄道相、逓信相、衆議院議長
廣池千九郎	中津藩	農家	中津市学校、麗澤館	麗澤大学	早稲田大学講師、神宮皇學館教授

出所：後掲の参考文献をもとに筆者が作成

これらの教育思想の系譜は、相互連関性を帯びて現存する私立大学の創設者を輩出した。上掲の四校の大学の共通点は、そのいずれもが実学主義を謳っている点である。

まず、福澤のいう慶應義塾の精神には「義塾」、「独立自尊」、「気品の泉源」、「半学半教」、「自我作古」、「社中協力」などのキーワードが並ぶが、ひときわ注目する点は「実学」である。慶應義塾大学のホームページでは、『福澤がいう実学はすぐに役立つ学問ではなく、「科学（サイヤンス）」を指します。実証的に真理を解明し問題を解決していく科学的な姿勢が義塾伝統の「実学の精神」です』[31]と説明しており、一般的に「慶應の実学主義」と評価が高い同大学の面目躍如であろう。福澤の唱えた自由、平等、友愛の精神は当時の封建制度の残滓が残る世相において湧き上がる知的欲求に応えるものであった。そのリアリズムの一端は次の逸話にも鮮明である。幕府が長州征伐（1864 年）に乗り出した際に、中津藩に対して動員令が発せられ、藩庁より福澤宛に塾内の中津藩士を帰藩させるよう命令書が来たものの、これに応じなかった。また、1868 年 5 月 15 日には上野彰義隊の戦の砲声を耳にしながらウェーランド経済書の講義を毅然と行ったという[32]。

次に中央大学のホームページによれば、『創立者たちの「建学の精神」は、抽象的体系性よりも具体的実証性を重視し、実地応用に優れたイギリス法についての理解と法知識の普及こそが、わが国の独立と近代化に不可欠であるというものでした。それゆえ「實地應用ノ素ヲ養フ」教育によって、イギリス法を身につけ、品性の陶冶された法律家を育成し、わが国の法制度の改良をめざした』[33]と同大学の「建学の精神」を説明しており、まさに今日にみる実学の伝統が誇示されている。なお、元田肇は創設者 18 人のひとりである。

そして麗澤大学は『「モラロジー」に基づく知徳一体の教育』[34]を掲げているが、これは廣池千九郎の教育思想によるものである。井出〔2006〕によれば、「小川のもとで学んだことは廣池の国家に対する意識を高めていくきっかけとなるのであるが、それと同時に小川の

受け継いでいる大分儒学の伝統を継承することとなった。小川の師帆足万里（1778－1852）に受け継がれた三浦梅園以来の西洋の科学的な合理主義と儒教の合理主義を融合するという精神は小川を介しての廣池の学問観、国家観などに受け継がれ、その合理主義の精神は広範な学問領域の根底に流れて」（p.124）いると論じており、小川含章（私塾麗澤館）に学んだ実学の精神が道徳科学専攻塾（麗澤大学の前身）の建学に繋がったと考える。

さらに法政大学であるが、「自由と進歩」を建学の精神に掲げ、2016 年に制定された法政大学憲章には、「自由を生き抜く実践知」と、その理念が表現されている[35]。同大学の創設者については後述する。

写真１　ザビエル像（上智大学）

写真２　宇佐神宮・六郷満山（神仏習合）

本稿では、これらの精神的起源を八幡神に見立てた。それは八幡神が宇佐から全国に勧請され、伝播していった史実に注目したからである。すなわち、辺境で出現した神が日本の中心に浸透していった神であることを意味している。そして発祥地における神仏習合、キリシタンとの対峙などの独自の因果関係は、地域に根を張る多様な変数をくわえることにより、建学のダイナムズムを起動させたのである。いいかえれば、当該地域は、文化的重畳性が思想形成へと収斂された場である。ゆえに地域における潜在的かつ精神文化の中心軸となった存在が八幡神であると考える。

清水［2014］によれば、『近世はやはり、それまでの仏をめぐる思想的展開のなかでは、より相対的視点が理論化されたといえるだろう。藤原惺窩、林羅山らが、その出自において仏者であったこと、仏教あるいはキリシタンとの思想的対峙を通して、朱子学の立場を「選択」したことを見落とすわけにはいかない』（p.16）と指摘しているように、選択的受容を可能とした日本における思想形成の特徴の１つであったと考える。

その意味において、大分県は古代より最前線（国境地帯）であったことから思想的融合の地であり、中世から近世にかけては多様性に富んだ受容力をもつ地域であり、内と外を相対的視点で捉えていたことにほかならない。つまり、それは各地域での選択に関わる角逐と葛藤から勃興した知的欲求であり、そこから紡ぎ出された実践知のエッセンスこそが、この地から複数輩出された大学創設者の建学の精神・理念の生成に繋がったと推察する。したがって、筆者の仮説とは概ね符合している。

城下町杵築の実践知と法政大学

現在、杵築は大分県の北東部、国東半島の南部に位置した人口2万7千人程度[36]の小さな市である。かつては松平（能見）家の城下町であった[37]。城下町は外周を矢来で囲まれ、武士の居住地域は北台・南台（上・中級武士）に、北台の西端の古野と城の北になる北浜が下級武士に、それぞれの居住エリアは分けられていた。寺院は南台の寺町にあり、町屋は南北両台に挟まれた谷町筋が中心であった。すなわち、城下町杵築の構造は町人の居住地を武家居住地が取り囲んでいた。武士が高みから町人を見下ろすという「身分の上下を居住地の高低差に上のせするという形でつくられて」[38]いた。これは江戸期の身分制度を街づくりに反映させたとも考えられる。いわゆるサンドイッチ型城下町という構造は日本で唯一の事例[39]であるという。

ここで前述の内容を反芻したうえで敷衍すれば、杵築藩を含む国東半島と近接する宇佐地域は八幡神に象徴されるように東アジア的（大陸・朝鮮半島）であり、かつ畿内・大和的である。また、寺院の建築様式などからも判明するように同地域は両勢力の拮抗の場であった[40]。さらには、「神と仏の最初の習合の結果が、八幡大菩薩であり、弥勒寺であった。八幡神・弥勒寺と天台密教が融合し、在来の修験道と結んで独特の仏教文化をつくったのが国東の六郷山」[41]であった。ありていにいえば、収斂進化したのである。そして大友氏の時代には、キリシタンとの文化的な対峙と受容があり、まさにローカルにしてグローバルな地域文化が創造された。くわえて戦国期には、鹿鳴越城という山城が築かれ、北からは大内氏の勢力侵入、南は日向に対する境界防衛の機能をもった。たとえば、前述の1586（天正14）年の豊薩戦争においては、島津軍の侵入に対峙する場であった[42]。いわば、地域住民を巻き込む修羅場でもあった。さらに時代が下り豊臣秀吉の天下統一は、結果的に小藩分立体制への起点となり、同地域の特異な精神文化を生成したのである。小藩分立は、人々を小さな枠に閉じ込めたというネガティブな評価がある半面、他方では、地域間競争や独自の文化を形成したというポジティブな評価もあることは見落とせない。

法政大学の創設者三名のうち金丸鉄、伊藤修のふたりが杵築藩士である。また、中央大学の創設者18名のひとりである元田肇は杵築藩が治める岩戸寺村（現・国東市）の猪俣家に生まれたことは先に述べた。なぜ、この地から複数の大学創設者が輩出されたのであろうか。仮説に示したとおり、知的欲求から「建学の志」へのダイナミズムは新・旧システムの角逐にともなう葛藤があった地域に端緒をみる場合が多いからである。まさに杵築藩は、この条件に該当している。これについては拙稿［2019］の文脈を以下に再掲する。

「1858（安政5）年には井伊直弼の決意によって日米修好通商条約が締結された。この条約は、公使の江戸駐在、神奈川・長崎・新潟・兵庫の開港、江戸・大坂の開市、自由貿易を規定し、領事裁判権、居留地設定などを認めたものであった。関税は協定制であり、税率は主として20%と決められた。これにより、開国は既成事実化し、攘夷論者の憤懣は井伊大老へと向かうこととなった。1860（安政7）年3月に江戸城桜田門外で水戸藩からの脱藩者17

名と薩摩藩士1名が彦根藩の行列を襲撃、井伊大老を暗殺した。いわゆる桜田門外の変である。この歴史的重大事件が起こった場所が杵築藩江戸屋敷前（現在の警視庁付近）であり、季節外れの雪が降るこの日、杵築藩士は襲撃の一部始終を同藩邸長屋の窓から凝視していたという。いわば、杵築藩は時代的葛藤における緊張状態の極限に置かれていたのである。いうまでもなく、この事件を契機に幕府の権威は落ち維新の動乱へと突き進むこととなった。事件直後、当該事件について杵築藩士は藩から他言無用を厳命されている。もし他言すれば、井伊大老が襲撃されているのになぜ助太刀しなかったのかと、幕府から咎められる可能性も十分にあったからである。このことを伝える藩士から国元にあてた手紙は残されており、その立ち位置の難しさを浮き彫りにしている。10代藩主・松平親貴は最後の杵築藩主となったが、官軍側として戊辰戦争に派兵している。譜代大名であり、父親良が佐幕派（第二次長州征伐にも幕府勢として参加）であったにもかかわらず、政策転換している」[43]。

以上が一般的に定説化した史実にみる実践知の事例である。

写真３　法政大学創立者顕彰碑（杵築市）

写真４　サンドイッチ型城下町（杵築市）

1880（明治13）年に法政大学の前身である東京法学社は、金丸鉄、伊藤修、薩埵正邦らの法律家によって設立された。当時の時代背景は全国的に自由民権運動、国会開設運動が盛り上がる潮流があった。東京法学社は、フランス法学の立場をとる自由民権派代言社として創立された[44]。松尾［1967］によれば、「金丸や薩埵は、フランス近代法思想をもって、当時の人民大衆に、人権の尊厳なること、法律や裁判が人民の生活と権利をまもるうえでとくに大切であることを教育し、啓蒙することにその生涯をかたむけた」（pp.38）と述べているように、無名の青年による情熱は、その時代特有の知的欲求に呼応している。金丸鉄は自由党員、薩埵正邦は立憲改進党員として藩閥専制政治をおこなった明治絶対主義権力と闘う立場であった。自由民権運動が反政府運動として高まりをみせた革命的情勢のなかで、現在の法政大学の建学の精神「自由と進歩」に繋がる草創期の角逐と葛藤が散見される。その淵源には金丸、伊藤の出身地である杵築藩の現実形成力が如実に作用しているのではないだろうか。また、薩埵は京都出身であり、薩埵家は、石門心学の流れをひく学者の家柄である。ちなみに石門心学とは、1729年に京都で石田梅岩によって創始され、神儒仏の三教を折衷した学問である[45]。この三人の同志的結合こそ、自由民権派代言

社（当時、東京に30ほどあったといわれる）[46]のなかで生き残り発展した根源的な建学の持続性を意味している。ゆえに今日の法政大学の進歩的学風形成に少なからず影響を与えたものと考える。

おわりに

本稿での考察は、冒頭に示した「新・旧システムの角逐があった地域に知的欲求の高まりがみられ、やがてそれが建学のダイナミズムに繋がる」という仮説を実証する事例として大分県に焦点を合わせた。本稿で辿った時代における角逐の構図を大枠で俯瞰すれば、八幡神の出現、大和朝廷と大隅隼人、大内氏と大友氏、（その間にザビエルの豊後訪問）、毛利氏と大友氏、（その間に巡察師ヴァリニャーノが臼杵で大友宗麟に謁する）、大友氏と島津氏、秀吉による豊後国の再分配などであり、それにともなう葛藤は不可避であったといえよう。藩単位では、一例として前段に幕末維新期における杵築藩を挙げた。

これまで概観したとおり同県の特性（地理的、歴史的、人的）を基盤として、後年の建学に繋がるダイナミズムを起動させたことがあきらかになった。建学という行為の起点には、能動的な因子を包含しているが、八幡神という実践的な神の出現した場所であることは地域性を象徴すると考える。折衷性、合理性、多様性を受容した地域では、観念論よりも実践論（生き抜くための叡智）が求められたのである。具体的には、三浦梅園－脇蘭室－帆足万里などのプラグマティックな思想家・哲学者の系譜である。本稿で触れた大学創設者は、いずれもこの系譜の影響を受けており、さらに自らの学問領域を切り拓き、その角逐と葛藤を建学へと転換させた。これらの創設者が遺した現存する大学四校の「建学の精神」をみれば鮮明である。それは、前述のような知的緊張状態から紡ぎ出されたものであり、とりわけ新旧交代の場面での角逐から出てくる知的欲求に収斂される。

以上のように本稿では、仮説の実証を中心に論じたものの、その教育思想や人的資源は現代社会に活かされているのだろうか。これがあらたな課題として浮上する。なおも疑義を呈する。この考察は別の機会に譲るにしても、近現代における同県の歩みにはネガティブな要素も指摘される。たとえば、『大分県の歴史』[47]の9章には「出遅れた近代化」の見出しがあり、鉄道の敷設や道路整備の遅れに由来した「裏九州」という蔑称も散見された。中世に海外から日本（九州）の中心と認識された豊後・府内。近世には徳川直轄地（天領）として九州の政治経済の中心となった日田。これらは近代以降に熊本そして福岡へ中心の座を取って代わられている。しかし「中心地」としての概念の変遷だけでなく、維新変動期には政治的に乗り遅れた実相は否めない。幕末の葛藤（第二次長州戦争）に際して、「藩論の統一に悩みつつも中津、杵築、府内の譜代三藩が幕府の動員令に応じ」（前掲、p.292）たものの、幕府側の敗北となり、ここでも凄まじい葛藤が働いたことは明白である。「岡藩や杵築藩、府内藩における尊王攘夷の動きも、藩単位のものを実現することはできなかった」（同、p.292）と幕末の政局に影響を与えた藩が豊前・豊後にはなかったと述べている。とはいうものの、このようなネガティブな要素にこそダイナミズムの起

動力が内在しているのではなかろうか。その内在的論理を浮き彫りにすることが本稿での試みであった。実際のところ、時代における角逐と葛藤から生じたエートスが全国各地に広がった事例が「八幡神」であり、「一村一品運動」[48]であり、前述の「私立大学群」なのである。筆者の仮説を基盤とした「中心と辺境の関係性」から生じるダイナミズムは、広義において「人間中心の社会」への転換を示唆する。大分県は、そのモデルケースになり得る蓋然性が高いと考える。いうまでもなく「人間中心の社会」では、持続可能なシステム構築のための科学技術と哲学の関係性は密接不可分である。それゆえに「知」を総合的に活用することが求められよう。

参考文献

天野郁夫［2009］、『大学の誕生（上）』、中央公論新社

天野郁夫［2009］、『大学の誕生（上）』、中央公論新社

天野郁夫［2013］、『高等教育の時代（上）』、中央公論新社

雨宮和輝［2018］、「専門学校令下における真言宗の仏教系私学に関する一考察　―宗門内部の教育機関のあり方を巡る議論を中心として―」、『日本教育史論集』第 5 号、pp.11-17

綾部敦［2013］、「高潔の衆議院議長　元田肇」、『ふるさと　国東偉人伝』、国東市教育委員会

別府大学ホームページ（https://www.beppu-u.ac.jp/general/story/）

深津容伸［2011］、「日本人とキリスト教－キリシタン伝道の場合－」、『山梨英和大学紀要』10 巻、pp.1-8

筥崎宮ホームページ（https://www.hakozakigu.or.jp/omatsuri/houjoya/）

廣池千九郎記念館ホームページ（https://www.hiroike-chikuro.jp/chapter1）

古川浩司［2017］、「日本の国境の変遷に関する一考察　－国境・境界地域研究理論の視点から－」中京法学、第 51 巻第 4 号、pp.1-22

五神真［2019］、『大学の未来地図―「知識集約型社会」を創る』、筑摩書房

平松守彦［2002］、『地方からの変革　地域力と人間力―グローカルという発想』、角川書店

法政大学ホームページ（https://www.hosei.ac.jp/hosei/daigakugaiyo/daigaku_shi/rekishi/）

飯沼賢司［2014］、『八幡神とはなにか』、角川文庫

井出元［2006］、『「日本人の道徳」を考える―廣池千九郎の生涯―』、『モラロジー研究』第 57 号、モラロジー道徳教育財団

井上智洋［2016］、『人工知能と経済の未来　2030 年雇用大崩壊』、文藝春秋

岩畔豪雄［1970］、『科学時代から人間の時代へ』、理想社

岩武光宏［2018］、「旧制私立大学の学祖・創設者の出身地にみる地域特性についての一考察」、『東京交通短期大学研究紀要』、第 23 号、東京交通学会、pp.29-44

岩武光宏［2019］、「幕末維新期にみる社会変動と知的欲求」、『東京交通短期大学研究紀要』、第 24 号、東京交通学会、pp.57-70

岩武光宏［2020］、「戦前・戦後を貫く知的欲求に関する一考察―ＡＩ時代と岩畔豪雄の省察―」、『東京交通短期大学研究紀要』、第 25 号、東京交通学会、pp.71-86

川合全弘［2019］、「一軍人の戦後 ―岩畔豪雄と京都産業大学―（下）」、『産大法学』、53 巻 2 号、pp.1-74
川合全弘［2021］、「科学技術の発展と人類社会の変化―就任の挨拶に代えて（1）―」、『京都産業大学世界問題研究所紀要』、第 36 巻、pp.175-176
上智大学史資料集編纂委員会［1980］、『上智大学史資料集 第１集（1903～1913）』、ぎょうせい
上智大学ホームページ（https://www.sophia.ac.jp/jpn/aboutsophia/sophia_spirit/sophia-idea/spirit-of-sophia/spirit2.html）
河村茂［2015］、「大分・杵築 城下町の風情を活かし和服が似合うまち創生」、一般財団法人日本不動産研究所ホームページ（https://www.reinet.or.jp/pdf/chihousousei/report/No11-2015Aug.pdf）
慶應義塾大学ホームページ（https://www.keio.ac.jp/ja/about/philosophy/）
北康利［2007］、『福沢諭吉　国を支えて国を頼らず』、講談社
神戸大学ホームページ（https://www.kobe-u.ac.jp/archive/news/2014/20140602_1.html）
杵築市ホームページ（https://www.city.kitsuki.lg.jp/soshiki/7/bunka/bunkazai/bunkazai/4644.html）、（https://www.city.kitsuki.lg.jp/soshiki/1/siminseikatu/4219.html）
鹿毛敏夫［2021］、『大友義鎮 ― 国君、以道愛人、施仁発政』、ミネルヴァ書房
桑原直巳［2009］、「キリシタン時代における日本のイエズス会学校教育」、筑波大学哲学・思想学系 『哲学・思想論集』、第 34、pp. 1-15
松尾章一［1967］、「薩埵正邦小伝（１）」、『社会労働研究』、14 巻 1 号、pp.37-68
松浦良充［2014］、「大学史から見た現代の大学　―大学〈教育〉を捉え直すために」、『シリーズ大学７　対話の向こうの大学像』、岩波書店
内閣府ホームページ（https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/）
佐藤快信、菅原良子、入江詩子［2012］、「明治期のキリスト教と教育事業～カトリックを事例に～」、『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要』、10 巻 1 号、pp.75-80
清水正之［2014］、『日本思想全史』、筑摩書房
種智院大学ホームページ（http://www.shuchiin.ac.jp/about/history.html）
玉永光洋・坂本嘉弘［2009］、『シリーズ「遺跡を学ぶ」056 大友宗麟の戦国都市』、新泉社
中央大学ホームページ（https://www.chuo-u.ac.jp/aboutus/principle/key_message/）
東京大学ホームページ（https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/history/b03_01.html）
外山幹夫［1975］、『大友宗麟』、吉川弘文館
豊田寛三、後藤宗俊、飯沼賢司、末廣利人、平井義人［1997］、『大分県の歴史』、山川出版社
達日出典［2007］、『八幡神と神仏習合』、講談社
宇佐神宮ホームページ（http://www.usajinguu.com/festival-detail/）
麗澤大学ホームページ（https://www.reitaku-u.ac.jp/about/idea/）
吉見俊哉［2021］、『大学は何処へ　未来への設計』、岩波書店
写真１　ザビエル像（上智大学）、筆者撮影
写真２　宇佐神宮・六郷満山（神仏習合）、前掲、宇佐神宮ホームページより写真引用
写真３　法政大学創立者顕彰碑（杵築市）、筆者撮影

写真４　サンドイッチ型城下町（杵築市）、筆者撮影

---

[1] 岩畔豪雄、陸軍士官学校、シベリア出兵を経て、陸軍大学校卒業。陸軍省軍事課長。日米交渉では駐米大使の特別補佐官を務める。インド独立協力機関長、陸軍少将。陸軍中野学校の創立に参画。戦後は京都産業大学設立に参画。以上、1967 年の岩畔への聴き取り記録をもとに書籍化［2015］された『昭和陸軍謀略史』を参照した。

[2] 内閣府 HP（https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/）を参照（2022 年 1 月 3 日確認）。

[3] 井上［2016］を参照。

[4] 内閣官房 HP（https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/jinkouchinou/index.html）議事録要旨を参照（2022 年 2 月 6 日確認）。

[5] 対象とした 25 校は 1920~1932 年に大学に昇格したものに限定している。

[6] 松浦［2014］、p.7 を参照

[7] 種智院大学 HP（http://www.shuchiin.ac.jp/about/history.html）を参照（2022 年 1 月 3 日確認）。

[8] 上智大学史資料集編纂委員会、尾原［1980］、pp.3-4 を参照。

[9] 上智大学 HP（https://www.sophia.ac.jp/jpn/aboutsophia/sophia_spirit/sophia-idea/spirit-of-sophia/spirit2.html）を参照（2022 年 1 月 21 日確認）。

[10] プロテスタントは 1890（明治 23）年までに 37 の学校法人が創立されていた。具体的には、聖公会派のウィリアムスによる東京の立教学校（1874）、組合派の新島襄による京都の同志社（1875）、メソジスト派の耕教学舎・美以美神学校のちの東京英和学校（1883、現青山学院）、長老派のヘボン塾・ブラウン塾、ワイコフの先志学校・神田の英知予備校のちの明治学院（1887）、神戸の関西学院（1889）、大阪の桃山学院（1890）などが挙げられる。一方、カトリックの教育事業は女子では、サンモール会の雙葉（1875）、シャルトルの聖パウロ会の仏和（白百合、1881）、男子ではマリア会によって東京の暁星（1881）、長崎の海星（1891）、大阪の明星（1898）の開設をみるも、そのいずれもが初等教育として始まったものであった。以上、前掲、pp.9-11 を参照。

[11] 佐藤・菅原・入江［2012］、pp.75-80 を参照。

[12] 岩武［2021］、pp.108-111 を参照。

[13] 東京大学の組織は、東京開成学校と東京医学校の統合再編によって生まれたものである。後者の東京医学校は、その起源を安政 5 年（1858 年）に神田お玉ケ池に開設された種痘所に有している。前者の東京開成学校は、江戸幕府が文久 3 年（1863 年）に開設した開成所の系譜に連なり、この開成所は、安政 4 年（1857 年）に設立された蕃書調所から改組されたものである。
この蕃書調所という組織は、貞享元年（1684 年）に設置された天文方からのつながりをもっている。天文方は、暦の編纂を所掌していた幕府の組織であるが、当初より、天文学や暦学を中心に西洋の学問知識の学習・研究を行っていた。そして洋学の重要性の増大に応じて、天文方の中で、蛮書和解御用という部門が設けられたが、幕末になり洋書の翻訳・研究の需要が急激に増大したことから、この部門を発展させ、洋学の教育・研究機関として蕃書調所が設立された。
この蕃書調所において当初任命された 2 人の教授職、箕作阮甫と杉田成卿は、いずれも天文方の職員である。また、このとき、天文方及び江戸城紅葉山文庫に所蔵されていた洋書が、蕃書調所に移管された。つまり、東京大学の前身である東京開成学校の系譜は、その学問のつながりはもちろん、人のつながりなどによっても、天文方に連なる歴史をたどることができる。なお、東京大学の初代総理である加藤弘之も、蕃書調所において教授方を務めていた。
以上、東京大学 HP（https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/history/b03_01.html）を参照（2022 年 1 月 3 日確認）。

[14] 雨宮［2018］によれば、「真言宗では専門学校令下では各宗派、特に連合宗派と高野山の間に対立ができており、宗派内の教育機関をどのように位置付けるのかということが大きな問題となっていた。そして、専門学校令により認可された後には、さらに高野派と連合宗派による対立が教育機関設置にも大きく影響を与えていることがわかった」と述べており、さらに「浄土真宗大谷派、本願寺派は、最終的に京都に教育機関が統一されるが、東京と京都の 2 つの都市に教育機関を設置していた。（中略）それぞれ僧侶養成機関としての京都の学校と、研究・教育機関としての東京の大学というように役目が分けられていた。しかし、真言宗は、高野山と京都に分立して教育機関が設置していたのは完全に宗派、特に高野派が他の宗派から独立しようとしたというのが理由である。つまり、真言宗における教育機関設置の動向は、教育機関をどのように経営していくかといった教育方針に関する問題ではなく、宗派間の意向の影響を大きく受けた事例であったと見ることができる」と宗派間の内情の違いをあきらかにしている。

[15] 岩武［2018］、pp.29-44 を参照。

[16] このほかに大分県出身の大学創設者には、水島銕也（神戸大学）、佐藤義詮（別府大学）なども挙げられよう。水島は神戸高等商業学校（神戸大学の前身校）の創設に関わり、初代校長となった。中津出身であり本稿でも指摘した同地域出身者の特徴でもある実学重視の姿勢を同校の理念に反映させている。佐藤は豊州女学校の経営を引き継ぎ、戦後これを母体に別府大学を創設した。
以上、神戸大学 HP（https://www.kobe-u.ac.jp/archive/news/2014/20140602_1.html）、別府大学 HP(https://www.beppu-u.ac.jp/general/story/)を参照（両 HP、2021 年 2 月 11 日確認）。

[17] 飯沼［2014］、pp.7-11 を参照。

[18] 724（神亀元）年には「隼人の霊を慰めるため放生会をすべし」との託宣があり、744（天平 16）年、八幡神は和間(わま)の浜に行幸され、鎮圧された隼人の霊を慰めるため、蜷(にな)や貝を海に放つ「放生会」の祭典がとり行われた。これが「放生会」の始まりという。
以上、宇佐神宮 HP（http://www.usajinguu.com/festival-detail/）を参照（2022 年 1 月 3 日確認）。

[19] 筥崎宮 HP（https://www.hakozakigu.or.jp/omatsuri/houjoya/）を参照（2022 年 1 月 21 日確認）。

[20] 前掲［2014］、pp.221-223 を参照。

[21] 豊田［1997］、『大分県の歴史』、pp.5 を参照。

[22] 古川浩司［2017］、p7 を引用。

[23] 桑原［2009］、p.3 を参照。

[24] 深津［2011］、p.1 によれば、「カトリックのイエズス会による伝道には現地への適応主義という特徴があった。日本研究や日本人が信じる仏教研究を重視し、日本人に合わせたキリスト教伝道を行った。それはすなわち、ヨーロッパのキリスト教を持ち込むことを避けたということである。日本人に受け入れ易いキリスト教の内容やあり方を目指し、外来の宗教 であるキリスト教が日本人の感性と働突しないように努めた」と論じている。

[25] 平井［1997］、p.266 を参照。

[26] 前掲［1997］、p.259 を参照。平井義人［1997］

[27] 北康利［2007］、pp.15-32 を参照。

[28] 杵築市 HP（https://www.city.kitsuki.lg.jp/soshiki/7/bunka/bunkazai/bunkazai/4644.html）を参照（2022 年 1 月 21 日確認）。

[29] 綾部［2013］、p.49 を参照。

[30] 廣池千九郎記念館ホームページ（https://www.hiroike-chikuro.jp/chapter1）を参照（2022 年 1 月 21 日確認）。

[31] 慶應義塾大学 HP（https://www.keio.ac.jp/ja/about/philosophy/）を参照（2022 年 1 月 21 日確認）。

[32] 前掲［2007］、pp.105-125 を参照。

[33] 中央大学 HP（https://www.chuo-u.ac.jp/aboutus/principle/key_message/）を参照（2022 年 1 月 21 日確認）。

[34] 麗澤大学 HP（https://www.reitaku-u.ac.jp/about/idea/）を参照（2022 年 1 月 21 日確認）。

[35] 法政大学 HP（https://www.hosei.ac.jp/hosei/daigakugaiyo/rinen/kensyo/）を参照（2022 年 1 月 21 日確認）。

[36] 杵築市 HP（https://www.city.kitsuki.lg.jp/soshiki/1/siminseikatu/4219.html）によれば、杵築市の人口は 2022（令和 4）年 1 月末現在で 27,582 人となっている（2022 年 2 月 19 日確認）。

[37] 杵築藩：豊後（大分県）、譜代藩、3 万 2 千石。

[38] 豊田［1997］、『大分県の歴史』、p.210 より引用。

[39] 河村［2015］、p.1 を参照。

[40] 前掲［1997］、pp.5-6 を参照。

[41] 前掲［1997］、p.6 より引用。

[42] 飯沼［1997］、pp.172-173 を参照。

[43] 岩武［2019］、pp.60-61 より引用。なお、本稿で再掲した詳論は拙稿を参考にされたい。

[44] 前掲 HP（https://www.hosei.ac.jp/hosei/daigakugaiyo/daigaku_shi/episode/soritsu/）を参照（2022 年 1 月 21 日確認）。

[45] 松尾［1967］、p.41 を参照。

[46] 前掲［1967］、pp.38-39 を参照。

[47] 末廣［1997］、『大分県の歴史』、p.292 を参照。

[48] 1979 年に大分県知事の平松守彦が提唱。1980 年から大分県内の全市町村で始められた地域振興のプ

ロジェクトである。平松［2002］によれば、『私が提唱した一村一品運動はそれぞれの地域の潜在力を引き出し、リファインして「ローカルにしてグローバル」に評価される地域力をつくる運動であり、同時に魅力ある「人間力」をつくりだす運動でもある』（p.176）と述べている。

[A consideration on the origin of educational thought and the "spirit of founding"— A case study of the founder of a university from Oita prefecture —]

[IWATAKE, Mitsuhiro・拓殖大学専任職員]

[現在の研究テーマ：地域における知的欲求の軌跡]